

漢法苞徳塾資料	No. 220
区分	資料
タイトル	『難経』の主題別字数
著者	八木素萌
作成日	

◎『難経』の構成を概観すると、

全字数	約 12,000 字弱		
脈論	約 6,000 字弱	五臓弁別	約 3,000 字弱
病証記述	約 4,200 字弱	陰陽弁別	約 3,600 字弱
治則関連	約 4,700 字弱	経脈論関連	約 4,800 字強
配穴穴性	約 1,700 字弱	虚実関連	約 5,000 字弱

等のようにになっている。

一つの難が種々のテーマに関連しているので、テーマに従って何度も数える事になるのでこの様な字数となった。如何に診察を重視しているかが良く分かる構成であると言えよう。十三難の終段の「知一為下工・知二為中工・知三为上工・上工者十全九・中工十全八・下工十全六」との論が、症候と臓象と脈（経脈と脈拍）という、診察の重要項目を良く運用する者が、上工（名医）である事を述べている点と良く照応している。

注：1

流传しているテキストによって、本文の字数には若干の相異がある。何れを正本とするか未だ定説は無い。最古の者でモットも権威があると言われるのは、台湾・台平の故宮博物館が所蔵する『難経集註』の本文の字数を調査したものである。つまり諸本の本文の字数に異同が見られるので、『難経本義』の旋風出版社刊行本を用いて、字数を数えた。この本は『古今医統正脈全書本』を元にして『四庫全書鈔本』『周氏医学叢書本』を参考にし校勘しているものであり、校勘後記に三本の異同を一覧表にし校注を表に記入したものである。故に「約」数を記した。

注：2

一つの難が種々のテーマに関連して記述されているので、テーマに従って複数回数えることになる。故にこのような字数になった。例えば「三十七難」の記述は五臓弁別にも陰陽弁別にも経脈論にも病証論にも該当している。